



四月十一日夕食直前大きな地震で避難所は停電。懐中電灯で照らしながら牛丼を盛り付け一段落。ストロボを焚き撮影(永井氏談)。

持続可能な社会に向けて

## ムスリムによる被災地支援活動

### 一大塚マシジドの事例

文化人類学を専門とする私は「異文化の理解、自文化の発信」をモットーにしている。具体的には、パキスタンを中心にイスラーム圏のNGOについて調査をする一方、学生と一緒に福島県いわき市で被災者の声を聞き取り、英語で発信する活動に着手したところである。その活動のなかで、パキスタン人の多い大塚マシジド\*(東京都豊島区。2000年設立)が、いわき市を中心に長期の支援を行っていたことを知り、気になっていた(いわき市の知り合いからも「避難所で、パキスタン人のつくってくれたカレーをいただきました」と聞いていた)。2012年5月9日と23日、2回にわたって同マシジドを訪れ、シディキさんら主要メンバーからお話をうかがうことができた。

#### 99回の訪問

99回。まず、こんなにも頻りに避難所に足を運びつづけたことに、感謝と敬意の念を抱かざるを

得ない。第1便は、おにぎり550個、インスタントラーメン、ビスケット、飲料水を積んで、2011年3月13日仙台へ出発。とりあえず宮城県庁に物資を預けている。第2便は同16日、第3便は18日とともに仙台マシジドへ。大塚のメンバーと交友のある仙台マシジドの方と連絡をとり、東海地方のイスラーム関係者が送ってくれた紙おむつ、お茶、インスタントラーメンを届けることができた。その後も矢継ぎ早に、宮城県の山元町、気仙沼市、南三陸町などの避難所に救援物資を届け続ける。3月27日の第8便から、原発事故の影響で救援が手薄になっていた福島県いわき市へ向かう。これ以降の活動は、いわき市にターゲットを定める形で展開していく。さらに5月以降、同市泉地区にある「いわきマシジド」を拠点にできたことが、大きな力となった。「避難所を回った帰り道に、管理人のサビールさんに、たまたま出会ったんで

東洋大学准教授 子島 進

すよ。そうしたら、調理場もあるから、いわきマシジドを使っていいよと言ってくれたんです)(シディキさん)。バングラデシュから来ている大塚マシジドの職員、ムスタファさんが1人暮らしだったこともあり、ここに1か月滞在して、交代でやって来る人々と一緒に料理をつくり続けた。「各種のカレー、やきそば、野菜いためを料理しました。サラダ、果物、ジュースも配りました」。7月になって避難所は徐々に閉鎖されていくが、市内の避難所に料理を届ける活動は、同月9日まで、ほぼ毎日続けられた。その後は、仮設への入居に際しての布団セットの寄贈、仮設住宅での炊き出し、さらに冬を迎えるとカイロの寄贈などといった形で、支援を2012年2月末まで継続した。

#### 国際協力の実績

国内での支援活動は今回が初めてだが、海外では実績がある。パキスタン出身のハルーンさんはこう説明してくれた。「私たちは、これまで10年以上にわたって、アフガニスタンへ古着を送る活動を続けてきました。9.11(アメリカ同時多発テロ事件)の前の話ですが、ヘラート地方が-20℃という寒さに襲われ、着るものが足りないということを知りました。私は、そのとき現地を訪問し、状況を確認しました。そして理事会で報告して、支援を訴えたんです。そのほかにも、スマトラ島沖地震(2004年)の際はインドネシアへ人と物資を送って支援活動をしました」。

このような活動を知ってのことだろう。「あそこなら、有効に使ってくれるはずだ」と、イスラーム圏各地から寄付金が大塚マシジドに送られてきた。「サウジアラビア、南アフリカ、香港、オーストラリアなどから個人の寄付がありました。私たちが支援しているパキスタンのスラムの学校で学ぶ子どもたちも、お金を集めて送ってくれました。イギリスのムスリム・エイドやアメリカのザカート財団といったムスリム系NGOからも寄付が届きました」。国内外から集まった寄付金は、およそ4000万円に達した。

#### 地域コミュニティとのつながり

とはいえ、緊急支援NGOでもない大塚マシジドが、多くの人手を要する支援活動を、どのよう



いわき市の避難所での炊き出し

にしてこんなにも長く続けられたのだろうか? 大塚マシジドの理事の一人である永井さんが続ける。「アフガニスタンへの支援活動を通してできたネットワークがあったからなんです。古着を集めだすと、大塚の商店街の人たちが協力してくれました。地域の外からも古着がたくさん届けられ、この4階建ての建物からあふれるくらいでした。今回もそのつながりで協力を申し出てくれた人がたくさんいました。ここを使って、何千個というおにぎりを商店街の人たちと一緒に握り続け、ボランティアで運転手をやってくれる人がいて、物資を連日車で運び出していきました。さらに、大塚マシジドとはこれまで直接関係のなかった人たちも、大勢手伝いに来てくれました」。

シディキさんは被災地で「ムスリムを助けるために来ているんですか?」と繰り返し質問されたそうである。「違いますよ、と答えました。震災前、いわき市にいたパキスタン人は16人だけです。このうち家族連れの10人は帰国し、残った6人は私たちの活動に協力してくれました。人間はみんなアードム(アダム。アッラーが最初に創造した人間)の子孫で平等です。そしてアッラーは、困っている人を助けなさい、そのための努力には十分に酬いてあげますよと、約束しています」。この言葉からは、ムスリムのボランティア活動が、イスラームの信仰心に根ざしつつも、外に開かれていることがうかがえる。今回お話を聞いて、ムスリムの礼拝の場であるマシジドが、日本の地域コミュニティに根づきつつあるという印象を受けた。さらに宗教や文化を横断し、社会的活動のハブとなる可能性も感じることができた。

\*マシジドとはイスラームにおける礼拝施設。モスク。